

基調発題

「震えるアンテナ」でつながり、

囚われから自由になる

渡部 翔子

1 「震えるアンテナ」で他者とつながる

昨年度の基調で述べたように(『高校生活指導』210号)私は、茨木のり子の『汲む』という詩から、「傷つきやすさの中にこそ、いい仕事を生む『震える弱いアンテナ』が隠されているのだ」というメッセージを受け取り、この30年「『震える弱いアンテナ』で相手の想いを汲み、対話を試みながら、共にまなびあおう」という気持ちで人とつながってきた。

学年主任になってからの3年間「誰のことも置き去りにしない、弱音を吐ける学年」を目指し、担任7人中4人が採用2年目初担任という学年の主任を勤めてきた。「最初が肝心だからシメる」と要らぬ圧を掛けることは極力避け、生徒と保護者の声を聴き、想いを汲み取るような対話を大事にしたいと折に触れて発信した。開校以来の歴史を築いてきた声の大きなY先生から「ダメなものはダメ。毅然とすべき」と言われた時「生徒がぶつかってきたとき、冷たいコンクリートではなく、血の通った温かい揺らぎを内包している壁でありたい」と咄嗟に出た言葉を、進級し副担任が入れ替わっても共有したいと、「誰のことも置き去りに

しない、弱音を吐ける学年にしたい」ということとともに、学年会議の最初のレジュメに載せてきた。

2 Mを受け止め、多様性を認め合う学年に

「入学前相談期間」の最終日に出会ったMは、幼い頃から性別違和を感じ、自宅以外では排尿の生理現象が起きなかったが、母親はトイレの遠い子という認識だった。入学式を目前に、男子の制服や髪型に苦しさ募り、初めて母親に打ち明けた。スカートを履きたいがまだ勇気が出ないという状況で、スラックスは女性のファッションの一つという捉え方で折り合った。面談後すぐ、当時の校長に極力早く教員研修と校則の見直しが必要だと伝え、その日の内に関連DVDを事務長が借りてきて、職員室で視聴した。入学式には、事情を知らない父親の指導もあり、規定通りに髪を切ってきた姿に胸が痛んだが、一足飛びに規定は変えられず、その後は髪を切らずに校長の特別承認という対応で、周りの生徒からの質問は、スルーして聞き流すようにしていたようだ。

本人の強い希望もあり、唯一の女性担任Z先生のクラスで三年間を過ごした。専門医ともつながれたが、体育時の

着替え、髪型指導を巡るストレスからか、抑鬱症状が出て、医師はできるだけ遅らせようとしてきた投薬も2年次の1学期後半から始められた。私は、何とかMを支えたいと、教員研修、全校生徒向け「性の多様性」講演会を経て「らしさの押しつけは人権侵害だと知った。学校の頭髪指導はおかしいのでは？」という生徒の声を学年集会で取り上げ、「意見を持つことも、この視点も大事」と話した。学年通信での発信、多様性を認め合う学年レク、所属の性教協から得た信頼できる情報の提供、関連する雑誌や新聞記事の抜粋を同僚の机上に配布、本人と母親に関連する映画・TVの推薦や貸し出し：自分にできそうなことは実行した。

Z先生が、素晴らしい感性和観察眼でMと近い悩みを持つRを見いだし、自然な接点をつくり、祈るような想いで見守るうち、互いに感じ合うものがあって二人はカムアウトしあえた。修学旅行も民泊2晩での入浴や男子の中での就寝がネックで踏み出せないでいたが、RやHの声掛けで行きたいに変わり、夜になったらホテルの1人部屋に戻って寝る」方向で参加が決まった。MとRとZ先生が、「修学旅行がこうなら素敵」という夢を語らう中で、「ホテルの1人部屋に独りは不安だし、寂しいし、つらい」という本当の想いが出せた。男性教員からの強い反対を受け、一度は

諦めさせる方向で動いたが、MとZ先生の苦悩を見るに忍びず、秘密裏に我々の部屋に寝かせる形で参加できた。現地でのあまりに生き生きした表情に、直前まで「我が儘」と批判的だったD先生も「Mを連れてきてよかったね！」と言った。

修学旅行直前に、同じ行動班の数名にカムアウトして受け入れられ、自信をつけたMは、旅行後も信頼できる相手を見出してはカムアウトしていった。ある日、「Mが授業中にトイレに行けた」と他学年の教科担当が嬉しそうにZ先生に報告するのを、職員室にいて耳にした教員皆で喜べた。そしてそのことを、成績会議の場でZ先生と私それぞれの言葉で、職員全員に共有できた。

3 コロナ禍での学び どうつながろうとしたか

コロナ禍によるコミュニケーション不全、管理的指導の強化で息苦しさが倍増する中、3年次が始まった。

11月中旬にハローワークの方を招き、講演会を実施した。生徒たちは、資格取得講座が受けられること、面接指導や履歴書の書き方指導もあることを知って驚いていた。

一週間後には、助産師による性教育講演会を実施した。

性の多様性に加え、支配・被支配でない対等な人間関係についても触れてもらった。振り返りを全員に配布した。

1月には、3年間で成長できたところ、どこを変えたらさらに学校がよくなるか等、振り返りアンケートを作り答えてもらった。そこには今後の学校を考え直すきっかけになるようなものも散見された。プリントとスライドにまとめ、家庭研修に入る前日のオンライン集会でフィードバックした。そこで「みんなの成長がとても嬉しい。その気づきや力を、一緒によりよい学校に変えることに活かされなかった悔いがある。この先も、ものごとを多角的に見て、どこかで誰かが苦しんでいないか想像して、自分にできることは何かを考えて行動していつてほしい」と話した。

2月上旬、恒例の総括会議で、この資料をもとに、「特に心に強く残っていることは、『いじめ』案件を加害者・被害者に分けずにどちらも大事だからみんなで守ってほしいと、周りの生徒たちに助けを求めたら応えてくれたこと、臨床心理士のアドバイスを受け、両家族が対面した場面で、自分の言葉で謝る姿に『自分の子と同じだ』と保護者が受け止めてくれたこと、修学旅行前後でMが信頼する相手にカムアウトし、行けなかったトイレに行けるようになったことを、先生方と一緒に喜び合えたことだ」と話した。会議

後、数名の同僚から、「今の話、感動しました。参加した甲斐がありました」「すごくよかったです。先生のレガシーを受け継ぎますよ」と言われて驚いた。例年、総括会議に向けて事前に各分掌の長が教員からの声をまとめて総括を提出しているが、今年は管理職の対応についての不満が書かれた文章もあった。今回の総括会議では、その件について教頭が説明する場面があり、ここ数年形骸化し意義が問われていた総括会議だが、私は、意味のある会議になったと、感じたままを教頭にメールした。翌日、教頭から、会議の前日は悩んで眠れなかったこと、いきなり資料に載せるのではなく、疑問を持ったときに直接聞いてほしかったが、コミュニケーションが円滑に図れず残念に思っていることなどを打ち明けられた。私は、「職場全体がコミュニケーション不全に陥っていたので、疑問を投げた人だけでなく、全体に説明されたことがとても良かった」と応えた。着任後関係を結ばずに苦しんでいたことが感じ取れた。「管理職はあまり発言すべきではないと思ってきましたが、語った方が良いのだと感じた。お互いに声に出していこう」と言われた。

4・Mの願い：本当の自分で卒業したい：

コロナ禍の中ライブで実施できた「卒業を祝う会」

Mは、就職を希望し2年次の1月から就職希望者向けの補習講座を受けていた。入社試験ではスーツを準備し、スカートで受けることも校長から承認されていたが、鬱状態が重くなり、結局、動き出せたのは、2月の家庭研修期間に入ってからのことだった。合う薬に巡り会って、症状が落ち着き、自らハローワークにいけるようになっていた。

卒業式の2日前に、学年委員会主催の「卒業を祝う会」を学年独自で行った。有志によるピアノの弾き語りやダンス、3年次が始まる直前に転出したA先生をサプライズゲストとして招いての熱唱（離任式がなかったので、生徒は大喜びだった）、私が作った思い出スライド（30分）、教員のダンス動画という内容だった。直前までライブでできるかどうか判らず、録画も平行して進めていた。「思い出スライド」には、行事を陰で支えた人の存在があったこと、我々がどんなことを学んでほしくて行事をつくってきたか、また、それに誠実に向き合う生徒のみんながいなければ、こんな素敵な思い出は残らなかつたこと、密かに撮りためていた初担任たちの3年間の苦闘や感涙も織り交ぜた。

楽しい行事がなく、ストレスを溜めてきた生徒たちは、エネルギーを発散させて盛り上がった。興奮が冷めない生

徒たちがようやくやく帰った後で、私と担任だけで卒業式シナリオの読み合わせがあった。Mに相談を持ちかけられたZ先生は20分ほど遅れて合流した。終了後、Z先生から語られたMの願いは「卒業式はスカートで参加したい」というものだった。

Mの願いを受け、それぞれに揺れる学年団

Z「進路は就職希望だったが、就活時期は鬱症状が重く具体的に動くことができなかった。今年に入って良い薬に出会い、徐々に前向きになって2月の家庭研修に入ってからハローワークにもいけるようになった。そこに至るまでの葛藤やカムアウトを経験しながら、最初から自分を開いて事情を話した方が支援を得やすいことを学んだMが、ハローワークの人には最初からカムアウトすることを選んだ。親身に向き合ってくれる担当者とやりとりするうちに『だったら、いっそのこと卒業式でスカート履いちやえば?』と言われて(ここで、S先生の「ハローワークの人も無責任にそんな:」と言う声が漏れる):『そういう表現方法もあるな』と本人が気づいて:友人からスカートを借りる算段もしているようです。ただ、いろいろなリスクを回避するにはあまりに急だから難しいかも知れないし、

まだ動き出さないでね。期待もしすぎないでと言っている」
K「それって、Mの成長ですよね。個人的には応援してあげたいけど:」

副主任「あまりに急すぎるし、生徒はまでも、いろいろな価値観の保護者のいるところで、動画とられてアップされて、卒業式終わってからSNSが炎上したら怖いですよね:余計に傷つくことになるんじゃないか。卒業式に急い金髪にしてくるようなもの。卒業式が終わってからにすればいいのに」

T「高校3年間、校則のない通信制に転学するとか選択肢はあったのに、つらくても我慢して男子のフリで過ごすということを本人が選択したんだから、貫いてほしい」

渡部「いや、本人の性自認に合った服装でということとは2015年に出された文科省の通達にもあるんだから:」

D「本人が予行でみんなにカミングアウトするならいいんじゃないかと個人的には思う」私自身、様々な周囲の反応を想像して逡巡しているうちに副主任の

「万が一、当日履いてきてしまった場合の対応を管理職に確認しておいた方がいい。予備のズボンないですよね。」制服サンプルが:裾が長いかも知れないけど:」に対して私が「その場合はホチキスで留めることもできるけど:」と

つい応答。

Z「えっ？着替えさせるのは：（避けたい：）」

S「もう何日かあればね：全体にコンセンサスを得ている時間がなさ過ぎる。式後にクラスでスカート姿でみんなと写真撮るくらいが現実的じゃないか」私は落ち着いて考える時間がほしかった。明日予行後にその方向で、担任から話をして理解してもらおうというのが着地点になった。議論を尽くして全員が納得というところまでいけない状態での解散だった。廊下を歩きながらも、まだ誰もが考えていた。

「蒸し返すみたいだけど：カミングアウトをしてもだめですかね？：いや、いいです」とD先生の逡巡の声がかかる。Z先生と二人だけで揺れた印象の修学旅行の時には感じ取れなかった、担任団全員の揺れが肌に伝わってきた。それぞれにMの願いを受け、動き方は異なるもののどうしたらいいのかとそれぞれに揺れていることが、私をさらに大きく揺らした。揺れると、隙間ができる。そこに、可能性が流れ込んでくる。

Mが自分を偽らずに表現したいという気持ちになったのは喜ばしいことだし、個人的には叶えてあげたい。また、それが叶えられたら、Mにとって、ものすごく大きな一歩になるだろうし、ここに居合わせる私たち全員にとっても

よい経験になるはずだ。けど：時間を掛けて保護者と生徒に話して理解を促すのも難しいだろうし。反応も怖いしどうすんの私？管理職は既に退勤後で相談できなかった。

学校の外のネットワークに背中を押されて：

帰宅後、高生研や性教協の3年間伴走してきてもらった仲間にメールで相談した。様々な視点からアドバイスが返ってきた。このまま、Mの願いを押し込めていいわけではない！という気持ちになった。学年会でのZ先生の悲鳴に近い声を思い出す。少なくとも、履いてきたスカートを履き替えさせることだけは避けねばという思いが強まる。翌早朝、Z先生に「もう一度、我々が考え得るリスクを説明し、人と保護者の気持ちを聞いて考えよう」とLINEを送る。他学年は学年末考査中。午後からは予行。その前に表彰の礼法指導と答辞の指導もあった。タイトな中、養護教諭に経過を説明する。「誰のことも置き去りにしない渡部さんの姿勢が結実した素晴らしい卒業式になるじゃない！援護射撃するよ」と背中を押される。教頭にも話し、予め校長の耳に入れておいてほしいとお願いする。校長としては、全面的に応援しようという考えであることが教頭を通し返ってくる。時間割を調整する。この時、生徒指導部長I先生

の試験監督を代わってもらうために、本音で話せるO先生に事情説明した。

O「オレだったら、『君の気持ちは解るけど、厳粛な卒業式は君だけのものじゃなく、みんなのものだよな、他の生徒や保護者や我々教員にとっても大事なセレモニーな訳だよな。みんなが望む形つてもものがあるじゃないか』とか、そういうことを話して解ってもらうかな。これまでの関係があるから大抵は解ってくれるはずだけどね」と言われた。釈然とせず話を重ねるうち「まあでも、渡部さんが大事にしてきたことや学年の意向を大事にすればいいんじゃない？オレの考えは古いのかもしれないし」と言ってくれた。2時間目に校長、教頭、生徒指導部長、養護教諭、担任、学年主任の6人で会議をした。Z先生が、入学以来の経緯と、Mが人との接し方を学び成長したこと、ハローワークの人の言葉で目の前が明るくなったこと、ずっと、男子のフリをして過ごしてきたけれど、卒業するときには本当の自分で在りたいと強く望むようになったこと等を語った。

私は、学年の様々な意見、入学直前にカミングアウトを受けた保護者と共に3年間悩みながら勉強してきたこと。文科省の通達。直前過ぎるといふ声もあったが、思春期に

自分がどうしたいのかを定めることは困難で、卒業式の直前だからこそできた決意でもあると思うから、本人と保護者の意向を尊重したいこと。少なくとも、勇気を出して履いてきたスカート履き替えさせるようなことだけは、他の生徒にも間違ったメッセージになるので決してしたくないことを話した。苦い顔のI先生に意見を求めた。

I「厳密に言えば校則違反。生徒指導部会で話し合う暇はないから、校長判断しかないんじゃないか」

校長「オレが決めていい？それならもう、我々は勇気を持って決断したMを全面的に応援する以外ないでしょ！よく決断したよ」全職員への情報共有は明日、式当日の朝となった。

式場設営後、学年団全員に集ってもらい、申し出から6人の会議を経て、校長の意向までを説明し、「リスクは本人と保護者に再度充分に説明し、その上で、どうするかは本人及び保護者に委ねる。スカートを履いてきても履き替えさせたりせず、次の新しい場ではなく、『3年間共に過ごしてきた・そして、欺いてきてしまった仲間に、本当の自分を見て知ってほしい、本来の姿でこの高校を卒業したい』というMの決断を尊重し応援したい」とZ先生と私の思いを伝え、了承を得た。その時出た声：Sの「生徒や保護者

から質問が出たらどうすればいいのか」、副主任の「本人がカムアウトを考えているのか、気持ちや覚悟の確認が必要なのでは」を受け、翌日全職員にどう話すべきか、考えた。

会議後、廊下を歩きながら

○「校長が決めてみんなが従うって構図だと良くないよね」
渡部「いえ、担任と私の願いを伝えた上で意向を汲んでいただけだと思っていきます」

○「ならよかったじゃん」

職員室に戻ると、早速Z先生がMに電話を掛けていた。途中、母親と代わった後、私も話した。明日、他の生徒からの質問には本人が自分で説明するのが本人の希望であり、保護者から質問が出たときには、渡部から「本人の性自認にあった制服を着ているだけです」と答えてほしいというのが母親の希望だった。

誰も「後悔しない」卒業式に

―3年間の成長として喜び合いたい―

当日、職員朝会直前、高生研の仲間が静岡大学M先生（県内の学校からセクシュアルマイノリティの生徒の相談を多数受けている）からのアドバイスを送ってくれ、大急ぎで

前日もらったアドバイスとあわせて読み直したら、何をどう話せば良いのかが不思議と見えて、ギリギリ骨組みだけのメモで朝会に臨んだ。

M先生からの助言は以下の通りであった。

さまざまな性的マイノリティと対話する中で、50歳を過ぎても自分の自認する性表現で卒業式したかったと後悔している人がたくさんいるので、できるだけ本人の意向に添うものであってほしいこと。アドバイスとして①カムアウトはリスクが大きいこと②性表現（スカート履くこと）と「私はトランスジェンダーだ」とカムアウトすることは全くの別物であること。③そこを混同して本人がカムアウトを望んでいないのに教師が語ったらアウトディングになること④制服の制約があるところでは、スカートを履きたいがためにカムアウトに追い込まれる人もいること⑤なぜスカートを履いているのか質問が出てもセクシュアリティは極プライベートなことだから答える必要はない。スルーできない場合は「理由があるのよ」でそれ以上の質問が出ることは経験上めったにないこと等が書かれていた。（⑤は大事な視点であったが、興奮のためか、次の職員への私の語りからは抜け落ちてしまった）

朝会で全職員に向けて以下のように話した。

「先生方、昨日は学年末考査の採点業務等でお忙しい中、式場設営大変お世話になりました。いろいろなことがあった〇期生がこうして今日の日を迎えられたのも、例え我々を取りこぼしても、様々な場面で先生方が気に掛けてフォローしてくださったお蔭だと、心から感謝しています。3年前、誰のことも置き去りにしない学年にしたいと思って今日までやってきました。そのため、学年の先生方には必要以上の苦勞を掛けたかも知れないと思っています。最後の最後まで、ご心配をお掛けし申し訳ありませんが、ここで先生方に最後のお願いがあります。入学前から性別違和に苦しみ続けてきたMから、2日前に『卒業式にはスカートで参加したい』という申し出がありました。昨日校長・教頭・生徒指導部長・養護教諭・担任・私の6人で話し合いました。学年団からも様々懸念されることが挙げられました。結果的には、それらのリスクを全て本人と保護者に伝えた上で、本人がスカートを履くことを選択した場合に、その気持ちを尊重し全面的に応援しようということになりました。確かに、他の生徒や保護者がどう反応をするか未知ですし、リスクです。でも、彼女が3年間を過ごしたこの〇〇高校で、共に過ごしてきた仲間に偽らない本当の自分として卒業していききたいという願いを尊重したい

と思います。本人の性自認に合った服装をすることとカムアウトを、つい我々は同じことだと捉えがちです。昨日、性の多様性について造詣の深い大学の先生からもアドバイスをいただきましたが、Mがスカートを履いてくることと、全体に対して言葉でカミングアウトすることは決してイコールではないそうです。本人は、あくまでも自然にスカートを履いて登校するだけなので、そこを混同しないようお願いします。我々が、勝手にアウトイングすることは絶対に避けなければなりません。ですから、先生方がもし、生徒から『どうしてスカートを履いているのか』質問を受けたら一言『理由があるのよ』とお答えください。大抵はそこでおさまるのですが、もしも更に質問が来るようでしたら、その時は本人が説明するそうなので『本人に聞いてごらん』と本人のところに行かせてください。また、保護者からの質問の場合は、昨日Mのお母さんと相談して決めた答え方を用意しておりますので、全て私のところにご案内してください。お願いします。彼女のスカート姿を『厳粛な卒業式を乱すもの』と捉えるのではなく『3年間の成長』として喜び合えたらと思います。Mも、Mを支えてきた子たちも、『大人になったときに後悔のない』卒業式にしたいと思いますので（私も後悔したくないという想いを込

めて)よろしくお願いします。3年間お世話になりました。また、本日一日よろしくお願いします」と学年団全員で頭を下げると、拍手で承認された。

朝のHRの様子が気になって、見に行ったが、教室は落ち着いていた。(気づいていない生徒もいたかも知れない) O「さっきのLGBTについての話、解りやすく説明が上手かったね。良い卒業式になるといいね」

退場時、ひと目姿を見ようとしていた職員でも見逃してしまいうくらい、Mは周りに違和感なく溶け込んでいた。堂々と胸を張って、晴れ晴れとした笑顔で花道を歩く姿が嬉しかった。

Mの存在があったことで、そしてMが声を挙げてくれたことで、私たち学年団は一緒に揺れながら、豊かに学ぶことができたのだ。3年間、生徒に問い続けてきた多様性を最後に否定するようなことにならなくてよかった。

しかし、多様性を認め合う社会を実現するために(学校に言い出せない生徒も一定数いるし、本来許可を求める必要のないものはずだから)誰もが自分のしたい服装や髪型を性別関係なく選べるようにシステムを変えるべきだったのに、3年掛けてもハード面は何1つ変えられなかった。一層不寛容さが増し、多様性が脅かされるような学校の在

りように教師でさえ喘いでいたのだから、生徒たちがどれほど息苦しかったかと、申し訳ない気持ちになる。

5 「誰のことも置き去りにしない」学校・社会に

ミニ卒業式

コロナ感染のため祝う会にも卒業式にも出席できなかったユウタの自宅療養解除を待って、学年でミニ卒業式を行った。校長は、日程調整しようと声をかけた私に、ギターを友人に教えるためとはいえ、このご時世にカラオケルームで数時間過ごしての感染という見立てを聞き、「カラオケなんかに行つて感染するようなのは自業自得なんだから、個別卒業式なんて必要ない」と言つたため、「世の中の偏見や差別意識を正すのが役目じゃないの」と失望し、証書を渡しながら何を言い出すか判らないと思い、学年での卒業式にしたのだ。

当日私が、体育館から紅白幕のケースを運び、学年の先生方に「教室みんなで張ろう」と声をかけると「あ、そこまで本格的なんだ」という軽い驚きの気配があった。「そりゃ、こういうことは本気で楽しまない」と心の中で応えつつ、机によじ登る人、下から支えてダブルクリップを

渡す人、職員室前に掲示してあった祝電を剥がしてきて飾る人、わいわい教室を式場に変えていくことを楽しんだ。学年に所属していて、その日出勤している人は全員来てくれた。壇上から撮影してあった卒業式の映像に合わせて、呼名し、送辞・答辞と校歌を聴いた。他の生徒同様、担任から卒業証書を渡した。その後、「祝う会」で流した思い出スライドと教員のダンス動画、ライブでできなかった場合に備えて録画してあった、出演するはずだった本人のギター弾き語り動画を上映した。11人の教員に囲まれ、緊張した面持ちのユウタだったが、「こんなすごい卒業式だとは想像してなかったです」と感激していた。最後にユウタを囲んで画面に収まるように、思い思いの方向から入り込んだところをZ先生が自撮りしてグループLINEにアップしてくれた。

副担任数名が「豪華で素敵な式でした。最後まで温かく対応されていて、1人1人を大事にするってこういうことかと勉強になりました」「ユウタ君の素敵な卒業式、良かったですね（笑顔）」「温かくていい式でしたね」と個別LINEでメッセージをくれた。生徒を真ん中に「目の前の生徒を1人1人大事にする」実践を積み重ねていくことで、教師は、殊更に「一枚岩」「チーム○○」「一丸となって」

なんてことを声高に唱えるときは違うつながり方ができるのではないかという、可能性を感じた。

私たちが知らず知らずに囚われる学校や社会の「呪縛」

Mのスカートについて6人で話合った時、I先生の「校則違反」という見方は、男女二元論を当たり前のよう押しついたり、理不尽な校則でも、「社会の理不尽さへの耐性をつけさせるために必要なのだ」という理屈で見直されぬまま人権侵害が放置されたり、学校に常に流れている支配的・管理的文脈の現れである。三年前から、私が困ると学年主任の先輩として助けくれ、本音で語り合えるOさんも、Mのことを相談したときには「個人の当たり前の要求（希望・想い）を『我が儘』とし、全体の『善』？秩序？を優先する」ように説得できるのが主任の腕の見せ所だとしても言うかのような反応だった。Mの件では果敢な采配を見せた校長も、ユウタの感染を自業自得と「自己責任論」でミニ卒業式の実施を否定した。

このように、今の学校や社会には何に縛られているのか、自覚できない様々な呪縛がはびこっている。私たち一人ひとりに、様々な呪縛にかけられた部分がある。そう捉えようと、価値観の違いがあって意見が食い違っても、敵と見

なすことなく、問題を外に置いて観ることができない。囚われに気づくためには、互いの想いに耳を傾け合い、対話をする必要があると思う。声に出して初めて、想いに輪郭ができる。

つながり、学びあい、対話を深めて「呪縛」をほどく

私には苦手なことが多く、主任をやりおおせる自信もなく、最初から「助けて」と言うしかなかった。完璧な人間などいない、誰もが凸凹を持っているなら、自分は独りでは立てない弱い存在であることを受け入れ、弱みを見せたい、失敗を許容し欠けた部分を補いあえるつながりを持ちたいと願い続けてきた。失敗は、隠しようもなくオロオロするしかなかった。カムアウトしてくれたMの勇氣には応えたいと思いつながらジタバタといろいろな機会を捉えて「どう思う？」と問い掛けるうちに、誰もが楽しめる学年レクにつながった「運動が苦手な子もいる」とか「修学旅行で独りで寝るのはつらい」とか3年間を振り返るアンケートでハッとさせられた「私が履きたいのは女子用のストラップスじゃなくて男子用のズボンだった」とか、排除されそうだったり見えなくされたりしてきた子たちが「自分を表す」声を挙げてくれるようになった。その声に押し出さ

れて、迷いながら、揺れながら、おっかなびっくり綱を渡っていたら、少しずつ一緒に揺れてくれる人が増え、徐々に、揺れることは悪いことではないと思えるようになり、誰かが失敗しても責めずに、できる誰かがフォローするよいうな学年になっていた。

私自身、実践を書きながら振り返り、対話を通して意味づけられることで、相手をコントロールしようという支配性が自分の中にもあることに気づいたり、過去のこわばりが、やはりどこかで他者からの評価を気にして自分を押し込めていたからだど気づけたりした。また、外部の専門的な知識を得ることで、生徒への見方が変わり、多様な生徒と「人間対人間」のフラットな関係が結べるようになって、その生徒たちとの対話からエネルギーを得て、ちよつと危険な取り組みにも、わくわくしながら挑めるようになった。

このように、人とつながり、学びあいながら対話を深めることこそが、つまらない囚われから自らを解き放ち、自由にしていくのではないだろうか。

一人一人の思いが汲み取られ、大事にされ、幸せになれる学校をつくりたい。そこから巣立った生徒たちと共に、そういう社会を築いていけるように。

(わたべ しょうこ)